

# フジチュウ 業務課課長

(すぎもと・ゆきこ)

## 杉本 由紀子さん



現場で指示書を渡す杉本さん

フジチュウ(名古屋市)は薄板板金加工技術によってエレベーター部品を製造している。業務課課長の杉本由紀子さん(60)はパートタイム勤務からキャリアを積んできた。難しい注文に他の部署や取引先と一緒に取り組み、納期通りに仕事を進められるとうれしいという。同社の定年は65歳だが、

再雇用によって70歳まで勤務できる。パートタイマーは年齢上限を80歳に設定。杉本さんは「加藤忠晴社長が社員の働きやすさに気を配り、休日を増やすなど、労働環境を整備してくれてありがたい」と強調する。自身も「できるだけ元気に働きたい」と意気込む。

# ミス削減目指して 欠かせない緊張感



毎月第2土曜日に掲載

大学卒業後、就職したものの2年ほどして結婚することになり、退職。3人の子どもにも恵まれた。その後、育児も一段落した頃、再び会社に通めようと考え、1998年10月、自宅近くにあったフジチュウに入社した。

## 専門知識 今も日々勉強

カーからエレベーター部品を受注し、しつかり期日までに納品されるように製造現場に指示を出した

り、必要があれば外注先に手配したり、製造の進捗(しんちよく)を管理する部署。

最初に担当したのは納品書の作成だった。エレベーター部品に関する知識は皆無だったので、仕事を覚えながら、自社が製造している部品についても徐々に学んだ。

普段エレベーターを利用する時もメーカーの名前を見るようになった。取引先だと、自社の部品が使われていると分かって少し誇らしい気分になった。

やがて職場に慣れてくると、製造の指示を現場に出す、進捗を管理する、取引先とやり取りするなど、仕事の幅も広がった。

業務課の仕事は手書きが多かったが、オフィスコンピュータも使っていた。「書類仕事が手書き中心からパソコンに移っていく、ちょうど過渡期だった」と振り返る。仕事を効率的に進めるにはパ



課長になり、部下に指示を出す立場にもなった

ソコンの知識も必要だと感じ、本を購入して勉強したり、オンライン講座を受講したり、積極的に学んだ。2005年、正社員になった。仕事の内容が大きく変わったことはなかったが、作業は進化していった。

例えば、7年ほど前には、生産管理がデジタル化された。通常の注文は、顧客からの指示をオンラインで生産管理システムに取り込み、そのまま現場に流すことができるようになった。ただ、オンラインで取り込めない注文は、業務課でシステムに入力しなければいけない。また、エレベーター部品の材料、製作工程など、出荷するまでに必要な情報の入力も業務課で行う。

もちろん安全第一で作業をしているが、業務課もやはり緊張感を持って仕事をしている。現場に伝える指示に間違いがあれば、間違った部品ができてしまい、もし仮にそのままエレベーターに使われれば、最悪、エレベーターの故障にもつながりかねない。そうした間違いは、ほとんどヒューマンエラーが原因だが、生産管理システムの導入によって減った。「これをいかにゼロに近づけるかが、日々の仕事の課題」と強調する。「確認したつもり」「思い込み」をなくすことが肝心だという。

主任、係長を経て10年、課長に就任。責任も重くなった。

ものづくりに強い興味があったわけではないが、続けてこられたのは「職場が自宅から近く、健康だったから」と分析する。エレベーター部品やその製造工程についても知識は増えたが、分からないこともまだまだたくさんあるので、「日々勉強中」と話している。

## デジタル化にも積極的に対応